

西原土地区画整理事業第1工区

第11次発掘調査報告書

(中越・十三塚遺跡)

長野県上伊那郡宮田村

1992

宮田村遺跡調査会

序

西原土地区画整理事業に伴う遺跡の調査も第11次となり、平成3年度は、工区のなかでは北東の、台地北縁の道路開設地点で実施されました。

事業に伴って実施してきた10次におたる調査の中には、今回の調査地点の付近でのものも何箇所あり、それらの結果から、遺構等の存在する可能性は少ないと見られたわけですが、昭和58年に実施した十三塚遺跡の調査の際、今回の工区のなかに十三の塚のうちの2基が想定されていたことから、発掘調査を実施するに至ったわけでありました。

調査の結果、想定されていた位置に2基の塚を特定することはできず、それ以外に遺構や遺物を検出することもできませんでした。幸いなことに今回の工事によって遺構等が破壊されることなく済んだわけで、これもまた、発掘調査のひとつの成果といえることができます。

調査を実施した8月下旬は残暑のきびしい日がつづいた時期でした。そのような中で現場の発掘作業にあたられた宮田村遺跡調査会会長 友野良一先生をはじめ作業員の皆さんの御苦勞に感謝申し上げます、序といたします。

平成4年3月10日

宮田村教育委員会

教育長 林 金茂

目 次

序

例 言

I 遺跡の概観と調査の経過	1
1 遺跡の立地	1
(1) 自然環境・地質 (2) 歴史的環境	
2 調査の経過	3
(1) 調査にいたるまで (2) 調査組織 (3) 調査の経過 (4) 過去の調査結果	
II 調査の結果	6
1 十三塚について	6
2 その他	7
3 まとめ	7

例 言

1. 本書は、平成3年度に実施した西原土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査は、宮田村(村長 伊藤 浩)の委託を受けた宮田村遺跡調査会(会長 友野良一)が、平成3年8月24日から28日にかけて実施した。
3. 記録図面、写真、出土遺物等の資料は宮田村教育委員会が保管している。

I 遺跡の概観と調査の経過

1 遺跡の立地

(1) 自然環境・地質

中越遺跡は、天竜川右岸に発達した太田切扇状地の北側の扇端部、扇端である天竜川河岸から約1kmの地点に位置している。この扇状地面は、小河川によって放射状に開折され、いく筋もの長峰状の台地の連なりとなっており、遺跡の位置は、大沢川と小田切川間の台地上の、大沢川がその侵食面を明瞭にし始める地点でもある(図1)。

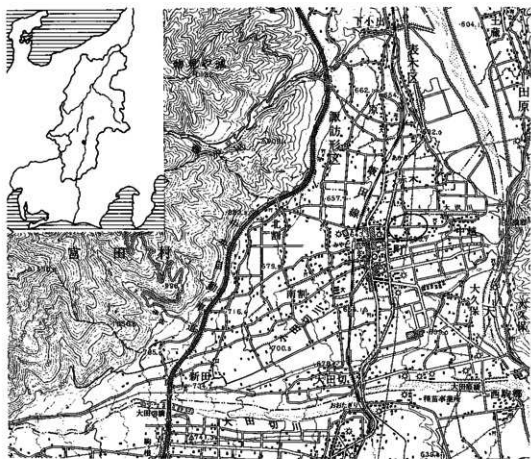


図1 位置図(5万分の1)

この台地の上面の地形は、両河川の侵食等によって様々な変化をみせているのだが、遺跡付近では、台地南縁に部分的に形成された低位面と、北の広い高燥面で構成されており、後者はさらに、やや低い南側と高い北側とに分けることができる。遺跡の範囲の台地上は、現在は東へゆるく傾斜する平坦面となっているが、今日までの発掘調査で、東流するいくつかの小規模な流れ、あるいは溝が確認されており、また、平坦に見える地点での腐植土層の厚さも一定でなく、現地地形はかなり改変が加えられているように見受けられ、本来は、起伏に富んだ地形であったことが想定される。遺跡地は宅地化が進み、現在も、進行中の土地区画整理事業の完了を待つことなく住宅が建てられつつあるが、昭和40年代以前は一面の畑地で、しかも、古い集落である中越から見た呼称である「西原」が、一帯の字名として定着していることから、畑地であった歴史はきわめて長かったと考えられ、このことも、地形が人為的にかえられてきた原因であったろう。遺物採集の適地として古くから知られており、遺物の保存状態は決して良くはない。

遺跡付近の土中には、太田切層状地を構成する人頭大から拳大の礫が多く、所によっては集中もしており、表土下が礫層となる地点もある。しかし、表土あるいは耕作土の下は、黒褐色土、褐色土、黄褐色土を経て黄色土に移行するのが一般的であり、腐植土の深い部分では黒褐色土の上に黒色土が存在し、浅い部分では、黒褐色土、次いで褐色土が欠けるか、ごく薄い。

また現在は、ほ場整備等によりすべて潤れてしまったが、台地北縁に湧水があり、中央グランド付近にも、かつては湧水があったとのことであり、これ等の水が、この地に集落を形成せしめた大きな力であったことはまちがいない。

中越遺跡には、高燥な台地北縁に位置する縄文前期中越式期を中心とする集落と、同じ台地の南縁に連なる縄文中期の集落、南の低位面に位置する縄文後期の墓域と考えられる集落遺構までが含まれており、結果としてその規模は、約24haと広大なものとなっている。そして、中越遺跡の中の、北東の台地縁辺に十三塚遺跡が存在しているかたちとなっている。

(2) 歴史的環境

大沢川と小田切川にはさまれた台地上面のほぼ中央には、先に述べた居住性の良さを証明するように、古くから連続と続く遺跡が確認されている。すなわち、中越遺跡で村内に2例しかない先土器時代の尖頭器が採集されていることから始まり、縄文草創期～早期の住居址の検出された向山遺跡。縄文前期と中期の大集落が生まれ、縄文後期の墓域も確認されている中越遺跡。弥生後期の大集落である姫宮遺跡。発掘調査されていないが、奈良時代の終わりから平安時代を通じた集落が想定されている田中下遺跡などがそれである。さらに、カラス林・三つ塚の古墳群もまた、まさにこの台地を見下ろしており、この付近の中核都市が、常にこの地に存在し続けてきたことがわかる。江戸時代の人為的町並みである宮田宿を、これらの遺跡の集中する範囲のほぼ中央を選んで設けたのは、象徴的出来事といえよう。

2 調査の経過

(1) 調査にいたるまで

昭和54年に策定された西原地区区画整理事業は、昭和62年に着工にいたり、現在も継続中であるが、それに伴って埋蔵文化財を保存する必要が生じたため、宮田村教育委員会では、宮田村遺跡調査会を組織し、発掘調査を実施して記録保存をはかってきた。

本報告の平成3年度の調査は、第11次西原地区埋蔵文化財発掘調査として実施された。平成3年8月20日、宮田村長伊藤浩を委託者、宮田村遺跡調査会（会長友野良一）を受託者、宮田村教育委員会（教育長林金茂）を立会人として委託契約を結び、契約では、埋蔵文化財の発掘調査と報告書の作成を業務内容とし、平成3年8月20日から平成4年3月10日までを委託期間としている。

調査地点は、中越の集落の西方にある諏訪神社から真っすぐ北へいった台地の北縁であり、踏みわけ道程度の現道を含む、幅4m、長さ60m、の範囲である（図2）。

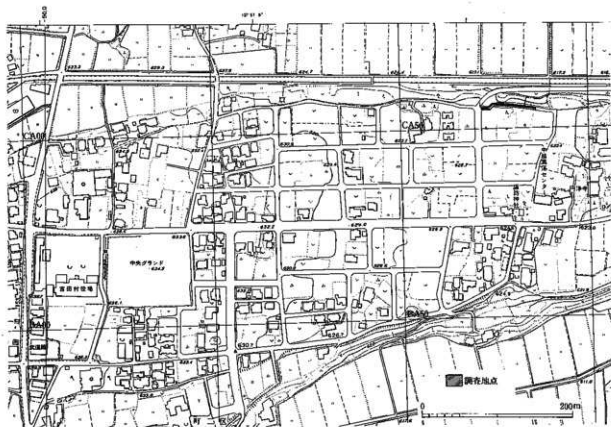


図2 調査地点図（「宮田村平面図」—平成元年12月作成—をもとに作図）

(2) 調査組織

今回の遺跡の調査にかかわる組織と、現場の発掘調査に参加され、実際の作業をしていただいた皆さんは次のとおりである。

◇宮田村遺跡調査会

会 長 友野 良一

委 員 宮木 芳弥

〃 片桐 貞治

〃 平沢 和雄

〃 青木 三男

〃 伊東 醇一

〃 唐木 哲郎

教育長 林 金茂

◇宮田村教育委員会

教育次長 小林 守

係 長 古河原正治

係 小池 孝

◇調査参加者

小田切守正 木下道子 西村アグ子 松下末春

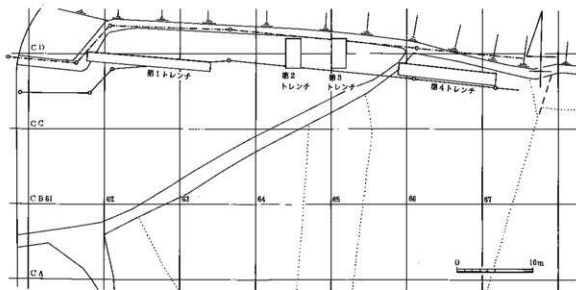


図3 調査区全体図

(3) 調査の経過

発掘調査の契約時には、塚の存在等を想定して、20日程度の期間を現場での作業に予定していたのだが、遺構や遺物が検出されなかったことから、現場での作業は8月24日から8月28日までの5日間で終了した。今年度は小規模なものを含めて10箇所を越える調査が継続してあったため、調査結果のまとめ作業に入ったのは、平成4年の3月で、同月10日には終了した。

発掘にあたっては、まず調査範囲を昭和53年に設定されている10m方眼のグリッド図におとし、塚の位置を特定するために20cmごとの等高線図を作成し、それによって見えてきた塚と思われる地点にトレンチをいれたが、それらは塚ではないという結論に達した。そこで、周辺の様子をさぐるためそれ以外の部分にグリッドに従って3箇所トレンチを入れたのだが、遺物がまったく出土しなかったため、その時点で作業を終了した。

(4) 過去の調査結果

十三塚は、昭和58年にその一部を発掘調査している。その際、十三塚全体を実測しており、説明はないが、図からみてその時すでに3基が所在不明となっていたようである(図4)。道路開設のため消滅してしまう6号と7号の2基を対象とした調査であったが、発掘では、十三塚の築造年代や性格を知る資料は得られていない。また、地元にもこれらの塚についての伝承は何も残されていないとのことだが、調査者は、中越集落の民間信仰の遺構と考え、付近の神社や寺との関連性に注目している(友野良一「狐塚上・十三塚遺跡」1984)。

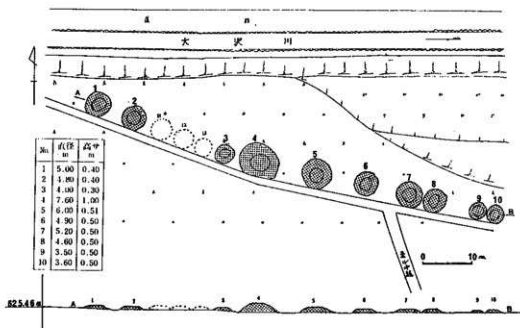


図4 十三塚全体図(「狐塚上・十三塚遺跡」1984から転載)

図4によると今年度の区画整理の予定地に径3.5m、高さ0.5mの塚が2基存在していたことになり、そのことが、今回発掘調査を実施する根拠となった。

II 調査の結果

1 十三塚について

等高線図を作成したところ、用地内に2箇所、用地外北西に接して伊那市地籍に1箇所の高まりがあることが明らかとなった(図5)。さらに広範囲を肉眼によって観察したのだが、それら以外に塚と思われるものを見いだすことができなかつたため、昭和59年に実施した調査の報告書にある8号が後者、9・10号が前2者と判断した。

そして、後者をのぞく用地内の2つの高まりを調査することとしたわけだが、規模が小さいため、まず2つの高まりの中央を結ぶ線上で土層の観察を行なった。ところがその結果、この2つの高まりは、いずれもごく新しい時期に、地表へ漆喰状のものをふくむ土が廃棄された跡であることがわかり、ほかに塚らしきものが見当らなかつたため、その時点で塚についての調査は終了とした。

昭和58年の調査時点にすでに3基が位置不明となっており、十三塚は、今日までに確認できたものが8基、そのうち現存するもの6基ということになる。

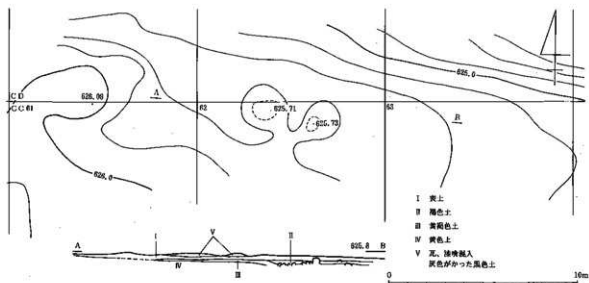


図5 塚想定地点等高線図

2 その他

①塚を調査したトレンチを東へ延長し、②用地中央に南北方向のトレンチを2本入れ、③東方に東西方向のトレンチを入れた。

①のトレンチで表土の下がすぐに礫層となっている地点があったものの人工的なものではなく、いずれのトレンチからも、遺構・遺物の出土はなかった。とくに③の地点は、果樹園となっていた関係か、表土がかなり削平されていた。

3 まとめ

中越遺跡の中の、十三塚遺跡の一部が存在していると考えられていた今回の調査地点であったが、結果として従来想定されていた2基の塚は、その存在を確認することはできなかった。昭和58年の調査結果から、塚が破壊されていたとしたらその痕跡を見いだすことは難しいと思われるけれども、もともと存在していなかった可能性のほうが高いと判断される。

十三塚にかかわるもの以外の遺構や遺物も検出されなかった。



図6 調査地点全景



図7 第3トレンチ



図8 塚想定地点土層

西原上地区面整理事業第1工区

第11次発掘調査報告書

(中越・十三塚遺跡)

平成4年3月発行

発行 富田村遺跡調査会

印刷 ほおずき書籍(株)

長野市中越293
